

「私も、今夜を楽しみにしています」と頬笑みかけた。「自動車だと二〇分でいきますから、七時半に出かけましょう。夕食まで、私は、ちょっと仕事をします」

「では、また」と、私は彼女の差し出した手を握手で返して、自分の部屋に戻った。そして、いつものように、ベッドの上にごろりと寝そべった。

黒い人——私には、これまで一度も口をきいたことのない人種であった。親しみも感じることのない人種であった。しかし、わずかに朝食を共にし、今またわずか一―二分の面接だけで、どうしてこう親しい気持が湧いて来たのであろうか。旅愁が私の心をとらえているのだらうか。いや、旅愁は既に私の心から消えている。ローマをあと二日で去れば、アテネ、カイロ、そして東京につくまでに、もう一週間。私の心は、故国にいる妻や子どもに会えるというだけで、そわそわしているといってもよい。一年間の別離も、もう週日で終るのだ——という期待が、大きく心を占めて、それが連日の張り切った行動を促進しているといえる。

ところが、彼女とのめぐり合いは、私にと

っては、意外なほど強く、心を牽かれることになってしまった。それは何故なのだろう。

私は、天井の四隅のすすけたようなしみをしながら、彼女との不思議なめぐり合いのことを考えた。もし、結婚していなかったら、独身であったら、このようなめぐり合いから、彼女と結婚するような気持にまで発展していったかも知れない——私はこんなことさえも考えた。

私どもは、連れ立って、定刻に家を出た。彼女の静かなものごしをかばうようにして、私は自動車に乗った。

星の降るような晩であった。木で組まれた椅子に、黒人の女性と隣り合って坐りながら、カラカラの浴場の、こわれた壁の背景を舞台にして、一幕・二幕と進んでいくオセロに、どんどんと引き込まれていった。星にも届けと、歌い手を声を揃えて歌いまくった。そして、オセロは妻を殺して自殺した。

幕が閉じて、さかんな拍手の中で、彼女と私とは顔を合わせ、目を合わせた。私は、何か感激が衝いて出て、涙ぐみそうになって、慌てて空を仰いだ。流れ星が一と筋、長く光を引いた。

幼児の教育 第六十巻 第一号

一月号 © 定価 五十円

昭和三十五年十二月二十五日印刷
昭和三十六年 一月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行者 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします。